

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 57 号



特集
セカンドキャリアで成功するⅡ

無料

スポーツクリ

toto

BIG

スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2	第57号を発刊するにあたり	長田 渚左
	■特集■	
	「セカンドキャリアで成功するII」	
4	キャリアはつながっている —— 柔道アジア大会金メダリスト 真壁友枝	取材・構成 川本 凜太郎
11	スポーツ支援の意義 —— 三井住友海上火災保険株式会社人事部 木山和彦	
15	プロ野球界から初の公認会計士 — 奥村武博 「この世で唯一超えられない壁は自分で作る壁です」	構成 川本 凜太郎
25	Jリーガーから初の弁護士 — 八十祐治 「勉強の積み上げはサッカーと一緒に」	構成 阿部 雄輔
32	ファーストキャリアはプロスポーツ 八十祐治・奥村武博・守屋拓郎	司会進行・構成 長田 渚左
40	スポーツに純粋にコミット —— 株式会社フォーラムエイト 武井千雅子	取材・構成 玉木 正之
46	『走』第4回 人間は「走る」より「歩く」で進化する？	玉木 正之
47	夢劇場『馬』No.29「忍者走法」	長田 渚左
48	バックナンバーのご案内	

南 伸坊 表紙のつぶやき

「34号の『アスリートがセカンドキャリアで成功するI』には剣豪➡画家になった宮本武蔵を描きました。今回は落語『ちはやふる』に登場する豆腐屋さん、元大関竜田川の想像図です。」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第43号～56号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第57号を発刊するにあたり

編集長 長田渚左



先日、所用で新宿から中央線の上り電車に乗った。

3人掛けの席に座ると、向い側に若い男女が座った。男の子の髪は金色で、女の子も流行のグレーに染めていたが、2人とも高校の制服姿だった。どうも初デートのようだ。

男の子「で、どんなお父さんなの?」

女の子「デイズニーランド好き」

男の子「オヤジでデイズニーランドは珍しいか……」

女の子「うん。それとスポーツツゴジラの収集家なの」

男の子「スポーツツゴジラ、ゴジラ?!」

女の子「フリーペーパーなんだって。でもすごく面白いて全部集めてるって」

私は文庫本に目を落としていたが、女の子の言葉

に覚醒して体が熱くなった。そして思わず「お父さんによろしく言ってね」と声をかけようかと思ったが、二人のせつかくの時間を邪魔してしまうかもしれないと考え直し、下車するまで聞き耳を立てるだけにとどめた。

スポーツツゴジラを発刊して16年。今回で第57号になった。山あり谷あり、年4回のフリーペーパー刊行には苦勞が絶えないが、駅のホームを歩きながら「そんなお父さんもいてくれるのだから……」と、何だかファイトが湧いてきた。

アスリートのセカンドキャリアはスポーツツゴジラが繰り返し特集してきたテーマである。元アスリートの活躍の場は、以前に比べるとずっと広がってきたように思う。指導者や、所属する組織や企業など、アスリートを支える側の意識にも変化を感じる。

愛するスポーツの「嬉しい変化」を、2022年のラストにお届けします。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



株式会社 御福 餅本家

人と社会を支える力



国士舘大学

文藝春秋

上月財団



立ちどまらない保険。

MS&AD



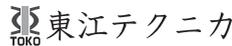
三井住友海上



株式会社東美物流



JWCPE 日本女子体育大学



公益財団法人
住友生命健康財団



(順不同)

セカンドキャリアで成功するⅡ

キャリアはつながっている

取材・構成 川本凜太郎



バンコク・アジア大会の柔道女子48kg級決勝で真壁友枝は北朝鮮のチャ・ヒョニョンを破り金メダルを獲得(1998年12月7日、タイ・バンコク)



1998年アジア大会(タイ・バンコク)柔道女子48kg級の金メダリスト、真壁友枝さん(48)は現在、三井住友海上火災保険株式会社で岡山支店津山支社長の重責を担っている。現役時代はあの谷(旧姓田村)亮子の好敵手として、名勝負を繰り広げたトップアスリート。引退後は所属する三井住友海上女子柔道部のコーチを経て、会社に残って社業に専念する道を選んだ。真壁さんにアスリートの`第2の人生、`について聞いた。

真壁 友枝(まかべ・ともえ) 1974(昭49)年11月28日、岡山県勝央町出身。小2から柔道を始め、岡山東商高2年で全国高校選手権48kg級優勝。卒業後に三井住友海上入社。48kg級で98年全日本選抜体重別で準優勝。同年のアジア大会で金メダル。02年の全日本選抜体重別で初優勝を飾った。03年の引退後、08年まで柔道部でコーチ。同年に一般社員として岡山支店津山支社に配属。東京本社勤務を経て、現在は津山支社長。

真壁さんは津山支社長に就任して、今年で3年目を迎えた。中国地方に点在する約25の支社のうち、女性の支社長は現在3人。支社長就任当時は真壁さん1人だけだったという。会社の高い評価と信頼の証でもあるが、本人は笑って謙遜する。

真壁 支社長が向いているとは思いません。私に任せてくれた勇氣ある上司に本当に感謝しています。その想いと期待に応えないといけない、応えたいという気持ちで日々仕事に励んでいます。

周囲の話では津山支社で営業で好成绩を収めて表彰されたという。その後、社内のチャレンジ制度を利用して東京本社の営業推進部にも勤務。まだ「女性の内務」という意識が強かった時代から、厳しい営業畑でキャリアと実績を積み上げてきた。

真壁 2008年に東京から地元津山に戻ってからは、私もずっと事務職でした。4年目くらいから「女性も営業を」という方針になって、私が支社の女性で一番年上だったこともあり、5年目から営業

担当として外に出るようになりました。

あらゆる業種を通じて営業職は、ノルマのある『過酷な職種』の代表格と言われる。精神的に耐えられなくなつて、離職を選ぶ人も少なくない。真壁さんもその厳しさに直面した。

真壁 優先順位を間違えたり、商品の内容を聞かれて答えられなかったり、調べるのに時間がかかったりと、とにかく失敗だらけで、自分の情けなさ、ふがいなさをかみしめる毎日でした。「当たり前」ができない現実が、精神的にも苦しかったですね。

辞めたいと思ったことは「いっぱいありました」と即答した。それでも、翌日はまた営業の現場に足を運んだ。

真壁 与えられている責任は果たさなければいけない、その思いだけでした。自分が嫌だからといって、お客さんとの約束は当然のことながら、これまででもたくさんの方々に散々迷惑をかけているうえに、さらにそれを途中で投げ出すということはできなかった

た。何よりも私には何をやっても「三井住友海上女子柔道部」という看板がついてきます。いいことも悪いことも。「柔道部に迷惑をかけられない」という想いも常に私の意識の中になりましたね。

夢と正社員

岡山県美作市で生まれた真壁さんは勝央町に移り、転校を機に小学2年の時にスポーツ少年団で柔道をはじめた。岡山東商業高校2年の全国高校選手権の48kg級で優勝。大学からの勧誘もあったが、卒業後は女子柔道部のある三井住友海上に入社した。

真壁 岡山で行われた都道府県対抗の団体戦で、東京都代表が全員、三井住友海上の選手だったことがあり、すごくクールで強くてかっこよかった。恩師に紹介していただいた北田典子先輩（旧姓持田・87年世界選手権61kg級銅メダル）にも憧れました。

もう一つ、入社前の会社訪問で「この会社に入りたい」と、心に決めた出来事があった。

真壁 会社訪問をさせていただき、面談していただきました。その際の会社の方たちのお話が、給与や条件面などのお金や環境のお話ではなくて、「どんな選手になりたいのか」「オリンピックをを目指すのか」といった夢を尋ねてくれたのがとても印象的でした。「応援してくれる会社」というところに惹かれ、どうしても入社したいと監督にお願いしました。

三井住友海上はアスリートも正社員として採用する。午前中は一般の社員と同じように会社に出勤して、所属部署で仕事をこなす。真壁さんはその会社の方針が、今につながっているという。

真壁 最初は営業を統括する東京営業推進部で、その後は人事部の能力開発チームに異動し、研修の資料をつくったりしていました。今思うと会社で勤務するということ、すごく大事だったと思います。満員電車に乗って通勤したり、職場の方々とコミュニケーションを取ったりして、社会とつながりを持って。あの経験がなければ、競技生活を終えて、す

ぐに社会の生活に慣れるのは難しかったのではないかと思います。

柔道部の柳澤久監督（当時）も、社会とのつながりを持つことを重視していた。柔道の稽古とともに、歴史の講義や漢字のテストなども取り入れた。

真壁 稽古の前後に先生の講義があったり、夏休みに『五輪の書』を読んで読書感想文を書きなさいとか。柔道だけじゃなくて、本を読んで学んだり、考えたりすることを習慣化させてもらいました。その経験は今でも役に立っていると思います。

96年のアトランタ五輪で先輩の恵本裕子が、日本女子柔道界初の金メダルを獲得した。その後、専用の道場も完成。真壁さんにとって五輪は、夢から目標へと変わり、日本のトップ選手へと駆け上がった。48kg級で96、97年と全日本実業選手権を連覇。98年にはアジア大会で金メダルも獲得した。しかし、五輪には手が届かなかった。

最強ライバルと覚悟

同じ時代に1歳年下の谷（旧姓田村）亮子がいたからだ。48kg級で五輪で金2つを含む5大会連続メダルの偉業を達成した、日本柔道界を代表する絶対女王の時代だった。不運な巡り合わせとも言えるが、真壁さんは「幸せな時代だった」と振り返る。

真壁 数年前に同じ48kg級の後輩、近藤亜美（14年世界選手権優勝、16年リオデジャネイロ五輪銅メダル）に「谷選手はやっぱり強かったですか？」と聞かれて、私もそういう時代を過ごし、戦っていたんだ、幸せな時代だったなと思いました。田村（谷）を倒すことだけを考えて大会に臨んだら、1回戦で負けてしまったこともありました。上を目指すには、まず目の前のことに全力を尽くすことの大切さも学びました。

谷とは4度対戦して、1度も勝てなかった。98年の全日本選抜体重別選手権、99年の福岡国際は、い

ずれも決勝で敗れた。しかし、谷と同じ時代を生き
た経験は、今の仕事にも活かしているという。

真壁 今振り返ると、田村を本当に倒すという覚悟
で臨んだのか、というところまでの覚悟はなかった
のではないかと思います。98年のアジア大会に出場
した時、田村が背負っているものの大きさを感じま
した。もし自分が代わりに五輪や世界選手権に出
て、金メダルを取る覚悟があるのだろうか。その
時、与えられた役割、責任を果たすことの重要性を
感じたんです。その思いは今の業務にもすごく活き
ています。この仕事を任されている以上は、投げ出
すわけにはいかない。選ぶ側にも選んだ（任せた）
責任があつて、選ばれた側には選ばれた（果たす）
責任がある。その覚悟を持たなければいけない。と。

選択と資格

真壁さんは03年に現役生活に幕を下ろした。その
後もコーチ兼マネジャーとして柔道部に残り、女子

52kg級の世界王者で五輪銅メダリストの中村美里ら
を指導した。一方で合宿の空いた時間などを活用し
て、多くの資格を取得した。

真壁 コーチ業は難しかったです。昨日まで選手同
士だった関係から、選手とコーチになり、立場が変
わっても、基本は人と人。接し方や伝え方を含め、
もっと勉強し、人としての幅を広げなければいけな
いと思いました。また、コーチ業も永続的に続ける
ことはできない、辞めてから次へスタートしても遅
いと思って、今のうちにいろんな資格を取ろうと考
えました。損害保険や生命保険の資格はもろろん、
興味のあるカラーコーディネーター、アロマコー
ディネーターなどの資格を取りました。やりたいこ
とが具体的にあつたわけではなくて、自分の幅を広
げるためでした。

08年の北京五輪後に柔道部を退部。コーチ時代に
さまざまな資格を取得していたが、真壁さんが第2
の人生に選んだのは、所属する会社で社業に専念す

ることだった。

真壁 その時、もう33歳でした。地元の津山に戻って再就職するのか、東京で再就職先を探すのかなどいろいろ考えると、やはりこの年齢でゼロからスタートするのは厳しいと思いました。そもそも再就職先があるかどうかも分からないですし、特にやりたいことも見つからなかった。同じゼロからスタートするのなら、お世話になった会社に恩返しができればいいなと考えました。

日本のトップアスリートは、現役を引退すると所属企業も退社して第2の人生を歩むケースが圧倒的に多い。しかし、アスリートも一般社員と同じ正社員として雇用している三井住友海上は、引退後も出身地などで一般社員として仕事を継続することを推奨していた。

真壁 津山に帰る前に代理店向けの研修に参加させていただいたり、いろいろとサポートしてもらいました。本当に会社と周りの方々に恵まれたんだと

思っています。

チャレンジと役割

現役時代も東京本社で業務経験はあったが、津山支社で働いてみると分からないことばかりだったという。損害保険の資格は持っていたが「すっかり忘れていた」。『元柔道アジア王者』の看板など通用しない世界。「本当に毎日が勉強という感じでした」と振り返る。そんな息つく余裕のない日々の積み重ねで、いつの間にか14年が過ぎていた。

真壁 入社を希望した「夢を応援してくれる」社風は、一般社員として勤務してから一層感じています。職場の皆さんが、できない私に根気強く付き合っている、指導してくれた。キャリアビジョンを描き、「こうなりたい」と言えば、それを応援してくれる環境がある。こんな私に期待してくれる上司もいれば、こんな私を支えようと頑張ってくれる仲間もいる。正直、今の仕事が自分に向いているかどうかなんて

分かりません。与えられた役割を果たそうと必死に頑張り、頑張り切った先が、誰かの役に立てていたら、よかったと思います。選んだ道が成功なのか、失敗なのかは後にならないと分からないですし、それも自分の捉え方と頑張り次第だと思っています。失敗も迷うことも、たくさんありますが、何事にもチャレンジし、一歩踏み出すことで、どんどん違うものが見えてくる。それは柔道のキャリアでも同じです。五輪に出られなくても、世界を目指して頑張ったことは、無駄ではなかったし、勝てなかったことで逆に成長できたと思う。この経験は自分の糧であり、私にしかない経験として、引き出しになっていると思います。

アスリートの引退後の人生は『セカンドキャリア』と呼ばれる。しかし、真壁さんのキャリアをたどると、現役時代の柔道部での生活、会社での勤務経験、谷亮子という高い壁……現役時代から続くあらゆる経験の積み重ねが、見事に一つの人生として

つながっている。

真壁 現役生活が終わったから柔道人生が終わりじゃなくて、ずっと続いていくものだと思います。柔道という経験を積んで、次のステージに向かうというだけで、経験してきたすべてのキャリアが、現在の自分の価値につながっているんだと思います。今も自分の幅を広げるために、1年に1つの資格取得を目指しています。でも、やはり一番の頑張るモチベーションは柔道部の選手の活躍です。頑張っている姿を見るとすごく励みになるし、勇気をもらいます。だから私も、選手たちに少しでも還元できるように、これからもチャレンジを続け、私にできること、私にしかできないことを、頑張っていきたいと思っています。



三井住友海上火災保険株式会社は、30年以上にわたりスポーツ界の第一線で活躍する選手の育成に取り組んできた。女子柔道部は金メダルを獲得した惠本裕子、上野雅恵、新井千鶴ら多数の五輪メダリストを輩出。女子陸上競技部も土佐礼子、渋谷陽子らが五輪に出場している。スポーツ支援の理念と意義について、人事部の木山和彦スポーツ振興チーム長に聞いた。



木山和彦

——1989年に女子柔道部、91年には女子陸上競技部を創設。長くスポーツ活動を支援しています。企業としてどんな価値を見いだしているのですか。

木山 『チャレンジ精神』『あきらめない姿勢』『わくわくする心』といったスポーツの持つ意味は、グローバルな保険・金融サービス事業を通じて、安心と安全を提供し、活力ある社会の発展を目指すという弊社の経営理念と通じるものがあります。それがスポーツ振興に取り組む私たちの根底にあります。

——具体的にどんな取り組みをしていますか。

木山 『社会人として一流を目指す』『地域との交流』『社員・代理店一体となった応援』という3つの柱

があります。今回のテーマでもあるセカンドキャリアという観点で考えると『社会人として一流を目指す』が、大きな軸になりますね。

——『一流のアスリート』ではなく、なぜ『一流の社会人』のですか。何とも渋い言葉ですね。

木山 社会人として一流という言葉の概念は難しいものですが、あえて1番目の柱として掲げているには理由があります。弊社のアスリートは全員正社員で雇用しています。各部署で仕事をしながら競技に取り組んでもらうことが大前提。これは30年以上変わっていません。トップ選手になれば競技団体からの大会派遣や、代表台宿への参加の依頼がきま

す。その時は競技活動を優先させますが、それ以外はメダリストでもみんな同じ。コロナ禍により、在宅勤務は増えたものの、電車に乗って会社に出勤しています。競技によって少し異なりますが、一般の社員と同じ午前9時出社で、アスリートの勤務時間は正午までの3時間。午後からは競技活動に専念できます。14年に発足したトライアスロン部、パラアスリートや女子サッカー、女子ラグビー、卓球の選手もいますが、全員職場で勤務しています。

——近年は企業に所属していても、競技だけに専念しているアスリートも多いです。企業とスポンサー契約を結んで、金銭面の支援だけをしてもらうケースも増えています。

木山 競技だけ、スポンサー契約だけとなると、候補は有名選手に偏ってしまい、育成という話ではなくなります。それは弊社にはなじまない。オールドスタイルかもしれませんが、まず社会で通用する考え方や知識を身に付けて、社会人としての土台を築

いた上で、競技も強くなつてほしいというのが基本方針です。勤務時間も3時間程度と限られているので、練習できないから勝てないというのは言い訳になりません。競技に専念しなければ五輪やパラリンピックに出場できない、メダルが取れないというわけでもない。弊社の今までのオリンピックやパラリンピアン、メダリストの存在が裏付けになっていきます。

——柔道女子48kg級でアジア大会を制した真壁友枝さんも、満員電車に乗って勤務したことで、社会とのつながりが持てたと話していました。

木山 一般社員と一緒に働くことで、業務だけではなく、例えば立ち居振る舞いや、電話の対応も含めて、すべてが勉強になりますし、様々な刺激を受けます。一方で同じ職場の社員も、一緒に働いている選手が大会で優勝したり、メダルを取ったりすると、『お互い頑張ろう』という相乗効果も出ます。

——そういえば三井住友海上は、社員などで構成す

るアスリートの後援会組織『ガッテンダーズ』が有名で、競技会場では社員や代理店の皆さんと一緒に大勢で応援されています。

木山 同じ会社でも、馴染みのない選手が大会に出場するとしても、なかなか応援に行く気持ちにはなれないと思います。しかし、ふだん職場で机を並べて働いている身近な同僚が、大会に出場するとなれば、自然と応援したいという気持ちが高まってきます。そこから応援の輪がどんどん広がって、うねりになっていくのかなと感じています。

——『一流の社会人を目指す』という言葉で思い出するのは、女子柔道部の創部以来の指導方針です。柔道の稽古だけではなく、読書感想文を書かせたり、漢字のテストをしたり、歴史の講義をしたり、いろんな学び、勉強をさせているのが印象的でした。

木山 女子柔道部は週1回、講師を呼んで英語の勉強もしています。女子陸上競技部でも同様に勉強会を行っています。

——アスリート教育が会社全体にしつかりと根付いているんですね。

木山 人事部でも毎月1回、所属する40人のアスリートに研修を実施しています。毎回いろいろなテーマを選定し、講師を招いています。これは、社会人として、アスリートとして成長してもらうための教育です。

——アスリートを人事部と広報部が2本柱でサポートしているのも特徴的です。採用、育成は人事部、広報は社内外PRと役割を分担しています。

木山 私たち人事部が年に1〜2回、アスリートと面談して、競技や職場での活動や、希望や悩み、セカンドキャリアを含めた将来設計などを聞いて、会社としてどんなサポートができるかを考えます。

——セカンドキャリアのお話が出ましたが、引退すると所属企業を辞めるアスリートが圧倒的に多い中、三井住友海上では継続雇用を推奨しています。

木山 そこに大きな意味があります。アスリートは

引退後の人生の方がずっと長いので、現役中から会社で仕事をして、そこで培った考え方や知識を生かして、引退後も本業での仕事をしてほしいと考えています。もちろん退社して新しい道に進む方もいますが、会社に残って頑張りたいという方は、全員に仕事を担ってもらう用意があります。正社員で採用しているのは、そういうメッセージでもあります。

——特徴的なのは引退後に故郷に戻って、地元の支店で働き続けられることです。

木山 幸いなことに弊社には全国各地に支店などの事務所があります。引退後は出身地の実家などから通える所で働いてもらうというのが基本的な考え方はです。勿論、状況によって柔軟に対応しています。

——真壁さんが岡山支店津山支社の支社長として活躍されていますが、引退後も継続して働いている方は何人くらいいるのですか。

木山 約30年間で170人ほどアスリートを雇用してきました。少し古いデータですが、現時点で会社

に残って業務についているのは、25人ほどです。

——96年アトラクタ五輪の柔道女子61kg級代表の恵本裕子さんが、五輪前に「金メダルを取ったら専用の道場を作って下さい」と社長にお願いして、本当に金メダルを獲得した。そうしたら彼女の希望通りに道場ができた。とても印象に残っています。

木山 女子柔道部は『女性活躍』という観点も大切にしていく経緯もあります。それまで道場がなく、出稽古やビルの一室で練習していたので、より環境を整えることで、女性活躍の幅をさらに広げようという考えだったのだと思います。女子柔道部はこの時に建てられた道場で今も練習を行い、何人もの五輪メダリストを輩出しています。

弊社はスポーツ支援を経営の一部として考えていますから、いい時も悪い時もしっかりと寄り添って続けていくという考え方があります。それが企業が果たす社会貢献の一つの形だと思っています。

セカンドキャリアで成功するⅡ

プロ野球界から初の公認会計士

奥村武博

「この世で唯一超えられない壁は
自分でつくる壁です」

構成 川本真太郎



阪神タイガースの元投手、奥村武博さんは、元プロ野球選手として初めて公認会計士になった。1997年のドラフト6位で阪神に入団したが、一軍公式戦出場を果たせず、わずか4年で戦力外通告を受けた。引退後は飲食業を経て、公認会計士試験に挑戦。9年の歳月をかけて合格した。野球一筋の元プロ選手が、なぜ難関の資格を取ることができたのか。どんな苦労があったのか。そして、その人生経験をふまえた「デュアルキャリア」の考え方について語ってもらった。

奥村 武博(おくむら・たけひろ) 1979(昭54)年7月17日、岐阜県多治見市生まれ。土岐商業高校時代は投手として夏の県大会準優勝。卒業後、97年のドラフトで6位指名を受けて阪神タイガースに入団。98年はウエスタン・リーグ5試合に登板して0勝2敗。その後は故障などで一軍出場経験のないまま01年に戦力外通告を受けた。13年に難関と言われる公認会計士の資格試験に合格。14年に優成監査法人入所。17年に公認会計士登録。一般社団法人アスリートデュアルキャリア推進機構の代表理事も務める。



阪神タイガース新入団選手発表会に臨む奥村武博氏(後列左端)、
前列左端は井川慶氏、後列左から3人目が坪井智哉氏(1997年12月18日、大阪市内のホテルで)

公認会計士の奥村です。以前はプロ野球の阪神タイガースの投手でした。引退後、いったんは飲食業の道に進みましたが、その後、9年という長い歳月をかけて公認会計士の資格試験に合格しました。現在は会計士の資格を生かして、野球、サッカー、陸上、バレーボールなどの現役選手に対する財務面のコンサルティングや、引退後に起業を目指す選手や競技連盟などの財務面のサポートをメインに仕事をしています。一方で2017年10月に一般社団法人アスリートデュアルキャリア推進機構を設立して、代表理事をしています。後で詳しくお話しますが、この機構の活動を通じて、これまでの私の経験をふまえた引退後のキャリア形成への取り組み『デュアルキャリア』という考え方を、アスリートやスポーツに関わる人たちに広めていきたいと思っています。私は野球を始めた幼稚園の頃から将来の夢はプロ野球選手になることでした。中学3年の秋、地元の岐阜県立土岐商業に甲子園出場経験のある監督が就

任したと聞いて、その高校への進学を決めました。当時は商業高校が何を勉強する学校なのかも知りませんでした。結果的にその選択がずっと後になって、今の仕事と結びつくことになります。

チャンスと戦力外通告

夏の高校野球県予選は高校2年が準決勝、3年は決勝で敗れて、結局、甲子園には出場できませんでした。私は身長が190cm近くあるのですが、それほど球速のある投手ではなく、コントロールを武器に打たせて取るタイプだったので、プロになれるとは思っていませんでした。ところが、夏の大会が終わった3年の秋、監督から「タイガースから指名の話がきている」と聞かされ、1997年11月のドラフト会議で6位指名されました。すでに就職も決まっていたため、親をはじめ周囲にはプロ入りに反対する人が多かったのですが、小さい頃から憧れていたプロ野球選手になれるチャンスですから、反対を

押し切って入団しました。

ドラフト同期には後に阪神のエースからヤンキースに移籍した私と同じ高卒の井川慶や、東芝から入団した坪井智哉さん、他球団では前巨人監督の高橋由伸さんがいました。新人ながら一軍で活躍する選手がいる一方で、私は1年目の98年半ばに右ひじを痛めて、オフに手術を受けました。翌99年はずっとリハビリで、ウエスタン・リーグ最終戦で1イニング投げただけでした。

その年の秋のキャンプでたまたまコントロールの良かった私の投球を見た野村克也監督に、「小山正明2世」と、阪神の往年の名投手になぞらえて評価していただきました。それが功を奏したのか3年目は春季キャンプから一軍に帯同して、オープン戦でも2試合に登板させてもらいました。ただ結果的にここが私のキャリアハイになりました。開幕戦は二軍で迎え、その後に肋骨を骨折して再びリハビリに専念。4年目の01年には右肩を痛めて、シーズン終

了後に戦力外通告を受けました。

結局、私のプロ生活は一軍公式戦の出場もなく、わずか4年で終わりました。戦力外になるときは本当にあっけなかった。球団幹部に寮の一室に呼び出されて「来季は契約しません」とお決まりの言葉を告げられました。ほかにも何か話したとは思うのですが、その一言だけで頭が真っ白になって覚えていません。その後、1年間は打撃投手として球団に残りました。打者が打撃練習をするときに投げる投手です。打撃投手は打たれるために投げるのですが、自分はどうしても打たれたくないという意識が働いてしまう。結局、その打撃投手も1年で戦力外になりました。

このときは、このまま肩の痛みを抱えたまま野球界にしがみついても、選手として復活することも、打撃投手を長く続けることも無理だろうと自分でも感じていました。同年代と比べても、4年間大学に行って、1年間浪人したくらいの年齢なので、早い

うちに外に出た方がいいだろうと考えて、野球界から完全に離れることを決断しました。

しいたけとメロンで1年

引退後に始めた仕事は飲食業でした。一般的にも野球選手のセカンドキャリアとして飲食業をイメージする人が多いと思います。引退する選手にとっても、もつともイメージしやすい職種です。自分もそうでした。なぜかというと同役時代に野球以外の世界で一番接点が多いのが飲食業界だからです。

引退してすぐに友人とバーを経営したのですが、その後、ホテルの調理場に職を変えました。就職面接のときにはタイガースの元投手という経歴を言わず、履歴書にも書きませんでした。そうすると社会では、最終学歴が高卒で、卒業後めばしい職歴もなく4、5年を過ごした22、23歳のフリーターという扱いになります。そうなる仕事はもう単純作業しか与えられません。先輩が隣でガバツと割ったメロ

ンの種をかき出したり、しいたけの軸をちぎるといった作業を1年延々繰り返すわけです。

なかなか辛い仕事だったので、メロンの種をかき出す手の動きはカーブを投げるときに似ているなどか、しいたけの軸を取るのはスライダーやな、などと思い描きながら作業をしていました、その一方でこの仕事をずっと続けて自分の将来はどうなるんだろうかという不安感が募り、そして野球選手という肩書がなくなったときの自分の無力さを痛感させられました。

総額約60億円と1日7000円

高校時代はずっと野球をやっていたのでアルバイトの経験もない。だから履歴書の書き方も分からないう。タイガース時代は寮生活だったので、水光熱費などの目に見えないお金を意識したこともなかった。本当に世間を何も知らなかったし、社会生活を営むための知識やノウハウは何もなかった。でも大阪で

仕事をしていて、いくらタイガースの元選手という肩書を隠しても、さすがに気づかれるだろうと思っていたのですが、これがまったく気づかれない。自分は圧倒的な無名選手でした。この先、どうしようかと不安ばかりが募ってきました。

私が社会に出た03年、ずっとBクラスだったタイガースが18年ぶりにリーグ優勝しました。この年に20勝5敗の大車輪の活躍をしたのが私の同期だった井川慶でした。日本を代表する投手になった同期の活躍にうれしくなる一方で、同じスタートラインに立っていたのに自分は何をしているんだ、わずか数年でこの差は何なんだと、今の境遇と比較して自分がどんどん置いていかれるような焦燥感がこみ上げてきました。タイガースは05年にもリーグ優勝して、翌06年に井川は総額約60億円でヤンキースに移籍しました。一方で自分はひたすらメロンの種をかき出し、しいたけの軸をちぎる。それで1日7000円、8000円。彼が投げる一球より少ないかもしれないな

い……いろいろなことが頭をよぎり、この時期は本当にどん底でした。

この生活から抜け出すには、何かを変えないといけないと思いました。でも結局、思いつくのはホテルがダメなら次はカフェなど、発想が飲食業から抜け出せない。それはなぜかという世の中にはどんな仕事があり、どんなことがお金になるのかをまったく知らなかったからです。そんなとき、ある人から分厚い資格のガイドブックを渡されました。「資格を取りなさい」というわけではなくて、「まずは視野を広げなさい」と言われました。

習慣と三振

そのガイドブックで公認会計士という資格を見つけたとき、私の昔の記憶と結びついたんです。それが高校時代の簿記の学習経験でした。高校は商業高校だったので、卒業までに簿記検定2級までは取るという暗黙の了解がありました。検定試験に受から

ないと、野球部の遠征に連れていってもらえなかった。だから簿記はしつかりと勉強しました。自分でも簿記は嫌いではなく、授業も真面目に受けました。その経験があったので公認会計士の資格に挑戦しようと思ったのです。

ご存じの通り公認会計士は難関資格です。長い挑戦になりました。すぐに資格予備校に申し込んで、アルバイトをしながら勉強を始めたのですが、そもそも高校を卒業してから長時間机に向かって集中して勉強する経験がなかったので、まずその習慣をつけることに非常に苦労しました。何しろプロ野球選手頃は新幹線で2時間座って移動するだけでも苦痛でしたから。だから毎日何時間も座って勉強できるまでかなり時間がかかりました。それでも、日商簿記検定の1級に合格したり、ちょっとした成功体験が重なって成果を感じるようにはなりました。最初は大阪でアルバイトをしながら勉強していたのですが、その後、東京の会社で正社員として働きなが

ら受験勉強を続けました。

そして、09年に短答式試験に合格しました。公認会計士の試験には短答式試験と論文式試験の2段階があります。短答式試験に合格すると2年間に論文式試験を3度受けられます。これを全部不合格になることを『三振』と言います。11年に私は『三振』してしまいました。もう一度、短答式試験からやり直します。「野球選手が三振したらあかんやろ」などと散々周囲から揶揄されて、もうあきらめようと思つたこともあります。でも何とか思い直して、勉強への取り組み方を見直して、2年後の13年11月に合格することができました。プロ野球選手を引退して12年、勉強を始めてから9年。まさに9回裏のサヨナラ満塁ホームランでした。

共通点と合格

『三振』した私がなぜ2年後に合格できたのか。もちろん一秒も無駄にしないようにストイックな生

活環境に変えて、猛勉強しました。ただ、この2年間で一番大きく変わったのは、スポーツと勉強の共通点に何となく気がついて、発想の転換ができるようになったことです。野球で培ったことは勉強にも生かせると思うようになって、実際にそれを勉強に取り入れることで、飛躍的に成績が伸びたのです。

具体的に説明すると、スポーツと勉強はどこが共通しているかというところからなんです。例えばスポーツ選手は一回失敗したら、なぜ失敗したのかを考えて、修正してもう一度トライする。それを繰り返すことで成長します。例えばビジネスの世界でもPDCAサイクルという同じような手法があります。目標を設定して、予算を決めて、活動を始める。目標に到達しなければ原因を分析して、やり方を修正して、再び目標へ向かって活動する。それを繰り返すことで業務が改善されます。受験勉強のサイクルも同じなんです。模試を受けて、間違えたら復習して、修正して改善する。それを繰り返して課題を克

服していく。そこに気がついてからは、畑違いだと思っていた公認会計士との距離がグッと縮まって、勉強に取り組む姿勢や効率が劇的に変わってきたのです。

私が通った高校がたまたま商業高校で、そこでたまたま簿記に出会い、それが公認会計士につながりました。すごく不思議な縁だと思う一方で、人生にとって無駄になる経験なんて一つもないんだと強く感じました。野球の経験も最後に受験に生かすことができました。そこから私はスポーツ選手のセカンドキャリアについての考え方、『デュアルキャリア』の重要性に気づいたのです。

私はプロ野球選手を引退して、それからセカンドキャリアを考えました。それまで野球しかしてこなかったのですが、すごく狭い選択肢の中から次を選ばなければならなかった。でもアスリートの期間は長い人生の一部にすぎません。だから、長い人生を歩む上でアスリートの時期に、同時にそれ以外の部分も

育てましようというのがデュアルキャリアという考え方です。

気づくキャリアと気づく能力

現役中から引退後のことを考えて、スポーツをやりながら公認会計士の資格を目指すといった、一般的な文武両道の考え方とは少し違います。今一生懸命やっているスポーツの練習や試合の中で、実は社会でも生かせるこんな能力が育っている。それを意識して取り組むだけでも全然違う。それが引退後のキャリアにつながるという考え方です。

例えば問題解決能力。試合の立ち上がりがよくあった投手が、尻上がりに調子を上げることがよくあります。これは自分の問題点に気づいて、試合中に修正して改善しているわけです。シーズンを通して調整や、来シーズンへ向けた新たなウイニングショットの練習などでも、自然と問題解決能力が養われています。状況判断能力もそうです。対戦チーム、

試合展開、対戦相手、気温や気候など、1球1球あらゆる要素に左右されながら状況が変わります。その都度、自分で逐一状況を判断して行動しています。ですからこの能力は実は野球選手は非常に高いと思います。

ビジネスでもチームで仕事をするとき自分がある立場で、どんな役割を果たすべきかを自分で考えて行動することが求められます。一般的にスポーツ選手の能力、スポーツ選手に求められるものといえば、根性とか体力とか上下関係といったところにフォーカスされがちですが、私はそういった部分に加えて、実は問題解決や状況判断といった能力もすごく高いと思っています。

この能力が一番気づかなければいけないのがアスリート本人なんです。野球しかしてこなかったという事実は、野球以外のことができないということを示す証明するものではありません。自分は野球を通じて、社会でも生かせるこんな能力を培ってきましたとい

う自負があれば、いろいろな業界にチャレンジしているはずですよ。

学生のアスリートはスポーツ以外に授業の時間が確保されています。私も簿記を授業で学びました。そういった授業を通して知識を増やしたり、学校行事などスポーツ以外のことに意識を高めておくだけでもデュアルキャリアになると思っています。私は働きながら公認会計士の受験勉強をしていました。大人になってから勉強する時間を確保するのはすごく大変なことで、高校時代、あれだけ授業時間、勉強時間を確保してもらえたのは本当に幸せなんだとつくづく気づかされました。

ゴールと通過点

私は懂れていたプロ野球選手になりました。でも1年目からケガをして、一軍公式戦で投げることなく、わずか4年で戦力外になりました。そもそもなぜケガをしたのか。突き詰めて考えると私はゴール

がプロ野球選手になることでした。それに満足して、そこからの成長をそれほど強く求めていかなかった。例えば大谷翔平選手はプロ野球はメジャーへの通過点でした。つまり目標設定をどこに置くかで、取り組む姿勢が変わってくる。だから、今、自分は目標設定が非常に重要だと思っています。

壁と自分

資格試験に合格して、実務経験を積むインターン期間を経て、17年6月に公認会計士として登録を完了しました。新しい会社も立ち上げました。でも、自分は一度、苦い経験をしているので、今はすべて通過点で、ゴールではないと自分に言い聞かせています。

結局、自分は野球しかしてこなかったから野球しかできないという考え方は、自分で自分の可能性を閉ざしてしまっているんだと思います。『この世で唯一超えられない壁は自分でつくった壁である』と

いう言葉を私は最近とても大事にしています。自分で壁をつくって無理だと思ってしまうと、問題点を改善しようと思わない。壁を超えようとしなくなり、でも、できないと思わなければ、何とか超えようと考えて道筋を探し続けるはずなんです。

私も「元プロ野球選手が公認会計士の資格試験に合格するわけないだろう」と散々言われました。でも、自分だけは絶対に合格できるはずだという強い思いを持って、自分の可能性を信じて、粘って粘って合格することができました。私の場合は簿記でしたが、スポーツ以外の可能性の種は、アスリートの中に必ず眠っているはず。それを私は自分の経験から学びました。自分自身が可能性を閉ざさなければ道は必ず開けてくると思います。

(この記事は、2017年11月28日に東京・渋谷ハクジユホールで行われた、日本スポーツ学会主催第5回スポーツ・セカンドキャリア・シンポジウムをもとに構成しました)

ガンバ大阪でプレーする八十祐治
写真奥の5番は元日本代表の宮本恒靖



Jリーガーから初の弁護士

八十祐治

構成
阿部雄輔

セカンドキャリアで成功するⅡ

2016年12月6日日本スポーツ学会第4回セカンド
キャリアシンポジウムで講演する八十祐治



八十 祐治 (やそ・ゆうじ) 1969 (昭44) 年10月31日、大阪府高槻市生まれ。大阪府立茨木高校、神戸大学経営学部を卒業後、93年、ガンバ大阪に入団。95年、ヴィッセル神戸 (JFL)、96~97年、アルビレックス新潟 (北信越リーグ。入団時のチーム名はアルビレオ新潟) でサッカー選手としてプレー。公式戦出場3試合、0得点。98~2000年、横河電機サッカー部に所属。JFL公式戦出場43試合、2得点。現役時代のポジションはMF。2005年11月、旧司法試験に合格。司法修習60期。07年9月、弁護士登録。大阪弁護士会所属。

1993年5月、Jリーグ開幕の年にガンバ大阪に入団した八十祐治さん。開幕5試合目でJリーグのピッチに立ったが、プロ選手5年間は公式戦出場通算3試合にとどまる。その後働きながらサッカーを続けた横河電機でまわってくる仕事は雑用ばかり。元Jリーガーのキャリア自体が世間では評価されないという現実に直面し、社会に通用する資格を取ろうと決意した八十さんは無謀にも最難関の司法試験を目指す。新聞もインターネットも見ず、外に食事にも出かけずに地道に勉強を積み上げて、4年後にみごと司法試験に合格した。

——大阪弁護士会に所属しておられる弁護士さん、八十祐治さんをご紹介します。どこからどう見ても立派な弁護士さんですが、「元Jリーガー」という異色のキャリアをお持ちです。

1993年5月15日、Jリーグが開幕しました。それまで日本のサッカー界はプロ契約をしている選

手はいましたが、チームや組織はアマチュアでした。そこにホームタウンと下部組織を持ったプロのチームによるプロリーグ、Jリーグができました。ものすごい人気でしたね。

八十 神戸大学2回生の時にはJリーグができるのが分かっていました。その頃からもう毎日プロになることばかりを考えて、勉強そっちのけでサッカーに打ち込んできましたので、ガンバ大阪のスカウトから声をかけていただいて契約書にサインした時には、さすがに手が震えました。契約金は大して高くなかったのです。お金よりもプロになれたということが嬉しかったですね。

初めてJリーグのピッチに立ったのは5月29日、カシマスタジアムでの鹿島アントラーズとの試合です。超満員のスタジアムで、となりの選手の声も聞こえないぐらいの観客の方々の声援の中でプレーして。試合は結局0-4で負けたんですけど、個人的にはかなり浮かれた気分でした。

ところがガンバ大阪には2年間在籍して、結局出場できたのは3試合だけでした。プロの壁にぶち当たったという、まさにその言葉通りでしたね。小学校からサッカーを始めて、常に努力すれば周りに評価されてきました。レギュラーになり中心選手になり、大阪の代表に選ばれたり関西の代表に選ばれたり、大学でもユニバーシアードの候補に選ばれていただったり。ほんとにやればやるほど周りから評価されてきたっていうのが、プロになるまでの私のサッカー人生だったんです。ところがプロに入ってからなかなか評価をしてもらえない。一軍で十何試合ずつとベンチ入りして、試合も途中から出してもらったりっていう時期があったんですけども、そこで結果を出せない。二軍に落ちてからは早く結果を残さないと一軍に戻れない、でも残せない、焦る気持ちも出てきて、ますます結果につながらない。完全に負のスパイラルに陥っていました。

3年目にヴィッセル神戸に移籍をさせてもらって

バクスター監督に出会い、ようやくレギュラー取れそうだったという時、開幕2週間前に左足首の靭帯を切ってしまった。その時はさすがにショックでしたね。——ガンバ大阪に2年、ヴィッセル神戸に1年、アルビレックス新潟に2年、そしてJFLの横河電機に3年と、生き場所を変えていった8年間を、四十代の現在振り返っていかがですか？

八十一歳でプロ入りして31歳で引退したのですが、ほんとにもがき続けた8年間でした。自分としては努力をしているつもりでも、何ひとつうまくいかなかったっていうのが二十代の印象ですね。もちろんプロになる時はこんなはずではなくって、ガンバで成功して、30歳を超えてもガンバで活躍するっていう気持ちを持って入団していますので、思い描いていたのとまったく違う二十代でした。

——色でたとえると、いろんな色のインクをぜんぶ混ぜて真っ黒になっちゃったみたいな、そんな二十代でしょうか。

八十 プロに入るまでは試合中、俺にボールを寄越せ、俺が何とかしてやるから俺にボールを出させていう気持ちでプレーしてたんです。けれどプロに入ってから、ミスをしたらどうしよう、またミスするんじゃないかっていうふうに思うようになって、途中から、ほんとにぶれぶれのサッカー人生でした。

アルビレックスを解雇される時に、選手としては使わないけれどチーム内部の仕事をしたらどうだっという話もあったんですけど、まだ28歳で、どうしても気持ちがおさまらなかった。プロ契約ではありませんが、働きながらプレーさせてもらえるとということ、JFLの横河電機にお世話になることにしました。

——お仕事はどんなことをされてました？

八十 主に人事の仕事です。人事と言ったら聞こえが良いですけども、雑用ばかりでした。電球が切れたから替えてくれとか、そのゴミを片づけてとか。横河電機では、昼は仕事をして夜に練習をして、土

日にJFLの遠征があつて試合をして、帰ってくる。とまた次の月曜日からフル回転で仕事と練習というような生活を続けてきました。31歳になってさすがに体力も少し落ちてきた。先輩たちもそのあたりで引退されることが多くて、チームもそろそろ若手に切り替えた方が良くのかなあと、そんなふうに思ったのが31歳の時でした。

——31歳で引退後、なぜ司法試験受験を選ばれたんですか？

八十 定年まであと30年間雑用みたいな仕事を続けるのかという問題に直面しました。3年間サラリーマンをさせてもらつて、君はサッカーしかやってきてないから、大した仕事はできないでしょというようなことを言われて、すごく悔しい思いをしていました。このままこの会社において、そういう悔しい思いを晴らせるのか、何かサッカーと同じぐらい熱意とか気持ちを込めてできる仕事はないか、年齢に関係なく仕事をするには資格を取るしかないって、

そういうふうには思ってたんですね。

サッカー選手として成功しなかった悔しい気持ちが鬱積してましたし、なおかつサラリーマンとしても評価していただけなかった。社会ではプロサッカー選手であったこと自体がさほど評価されないという現実にも直面して、そんな人たちを見返してやろう、自分の力でサッカー選手の価値を見せてやろう、それなら一番難しい司法試験に受かってみせよう、そんな気持ちでしたね。

ただその時にはまだ司法試験がどれだけ難しいかわかりませんでした。合格率3%だとか、難しいってことはうすうす分かってましたけれども、一次試験と二次試験があつて、二次試験はさらに三段階あるなんていうことも、司法試験の予備校2年分の授業料100万円、なけなしの100万円を振り込んだ時に調べてはじめて知ったんです。

——奥様は反対されなかつたんですか？

八十 妻も私と結婚するぐらいですからちよつと変

わつたところもあつて、まあ頑張つてみたいな感じで軽く言われたのを覚えています。僕がサッカーで悔しい思いをしているのをずーつと傍で見えてましたし、僕が言い出したら聞かないのも分かつていましてからね。

——それからは横河電機のサラリーマンをやめて、勉強一筋ですね？

八十 仕事をしていると勉強時間を確保できないので、会社をやめて地元の大阪府高槻市に戻つて勉強をはじめました。もともと勉強が得意ではないので、最初は机に向かうだけでも苦痛だったのですが、一日12時間ぐらいは勉強しました。ただ働いてないですからお金がない。妻が働いていた時期もあります。上の子供はちっちゃかつたし、その上何を思ったか、僕が合格する年に妊娠をしまして、また働けなくなるという、人生設計まったく行き当たりばつたりなんです。可哀相ですけど子供には外食なんかさせたことがなかつたですし、新聞を取つてない、

インターネットにも接続してないので、外部から情報が入ってこない。そもそも三十過ぎのおっさんが仕事をやめて勉強だけしてるとですね、社会から隔離されたような気持ちになります。その期間自分でも思っていないぐらいのプレッシャーで苦しみました。受かる保証のないこんなことをやっていて良いのかって毎朝起きたら思うし、その不安を振り払うためには勉強しないといけないとか気持ちも揺れ動いて。ちよつと頭がおかしくなりそうでした。

——平成17年11月9日のことを教えてください。

八十 最終合格した日ですね。合格発表は東京の法務省の赤煉瓦の建物に貼りだされるんですけども、僕は大阪にいますので、ちよつとタイムラグがあるんですが、ホームページに上がるのを待っていました。インターネットに接続して待っていたら、東京にいる兄がわざわざ見に行ってくれて、携帯に電話してくれましたよ。受かったと聞いた時は嬉しいより何より、ああこれで司法試験の勉強をしなくて良い

んだという、そういう気持ちだけでしたね。

——元プロサッカー選手で司法試験に合格された方はほかにいないそうですが、サッカーをやつてらしたことが試験に役に立ったことはありますか？

八十 スポーツつて試合にスポットが当たりますけど、練習やふだんの生活からほんとに地道に地道に積み上げて、そうしてやつとグラウンドに立つてプレーするつていう、地道な作業の繰り返しですよ。勉強も結局一緒で、地道な作業を繰り返して繰り返して基礎の部分をしつかり積み上げていく部分はサッカーと一緒に思いつつながら、むしろ生意気ですけど、サッカーでは地道にやつても結果が出ないことが多かったんですが、勉強は地道にやつていれば自ずと知識も増えていきますし、結果が出るので、司法試験もサッカーよりは通りやすいなと思った。通ったから言えるんですけど。

——プロスポーツ選手のセカンドキャリア問題を語る時、現役生活は必ず何年かで終わるのだから、

その時のことを頭に置いて、資格を取るとか、そういう考えを持つていた方が良いんじゃないかという意見があります。八十さんはどう思いますか？

八十 J1やJ2の選手にプロサッカー選手の先輩としてお話しさせていただく機会が何度かありました。やめたあとのことを考えるのも良いことです。でもプロサッカー選手であれば、今日の前のことに100%捧げて欲しい。100%ここに打ち込む体験を積み重ねていけば、サッカー以外のことにチャレンジする時も役に立つて伝えていきます。

ただ僕の場合は正直やりきったという気持ちにまではならなかった。その煮え切らない部分が司法試験への後押しをしたのもたしかです。サッカーでもうひとつ成功していたら、違う進路を選んでたかもしれない。煮え切らない気持ちを精算するために司法試験に挑んだっていうのが正直なところですね。

—— 弁護士さんとして今、どんなお仕事をされていらっしゃるんでしょうか？

八十 離婚とか相続とか、ご家庭の資産に関する紛争や、家を建てたのに欠陥があるやないかとか、そんなほんとに巷であふれてるような紛争に入らせてもらう仕事が多いです。

—— お仕事面白いですか？

八十 つらいです。もともとサッカー以外では荒っぽいこと好きな方じゃないんで、人の紛争に入っていくのは本当にしんどいです。ただそういう紛争ばかりやってるわけじゃなくて、山口蛍選手（現セレッソ大阪）が2015年12月にブンデスリーガのハノーファーに移籍するまで2年間、代理人をさせてもらったり、サッカー選手と一緒に仕事することもありましたし、弁護士はほんとに幅広い仕事ができます。弁護士のやりがいつて、カッコ良く言うと、立場の弱い方がひとりではなかなか声を上げられないところを法律の専門家としてサポートできるところで、一緒に声を届ける仕事ができるときは、ああ良かったなあと思いますね。

セカンドキャリアシンポジウム

ファーストキャリアは プロスポーツ

司会進行・構成 長田渚左



八十祐治氏

奥村武博氏

守屋拓郎氏

本誌「スポーツゴジラ」は、日本スポーツ学会とともに、アスリートのセカンドキャリア（デュアルキャリア）をテーマに繰り返し特集してきた。近年はアスリートの意識や周囲の環境に変化が見られるようになってきた。そこで日本スポーツ学会はセカンドキャリアで活躍する元プロ選手3人をゲストに迎え、『第121回スポーツを語り合う会』として11月19日に都内でシンポジウムを開催した。

——プロスポーツ選手を引退後、難関国家資格を取得して、セカンドキャリアへの扉を開いたお三方をご紹介します。

ガンバ大阪などに所属したJリーガーから弁護士に転身して15年の八十祐治さん、そして、公認会計士になられたプロ野球・元阪神タイガース投手の奥村武博さんと、元プロキックボクサーの守屋拓郎さんです。八十さん、奥村さんは以前にもスポーツ学会で講演されておりますので（内容は本誌57号P15とP25くに再録）、初登場の守屋さんのプロフィールをご紹介します。

1983（昭和58）年、茨城県結城市生まれ。男ばかりの3人兄弟で、東京都町田市で育ちました。『キャプテン翼』の影響でサッカーを始め、中学でもサッカーを続け、堀越高校のセレクションを受けて合格。ところが、半年で退学して、1年後に高校再試験を受けたら不合格。その後、通信制の高校に入学し、編入試験を受けて入った都立松が谷高等学校

校を卒業しました。



——守屋さん、波乱の高校時代でしたね。

守屋 自分でも将来どうなるのか不安でしたが（笑）、まあ思い返せばいろいろ考える時間だったのかと……。

——卒業後は浪人中にキックボクシングのジムに入門して、2003年7月にプロのライセンスを取得。翌2004年には早稲田大学社会科学部へ入学しました。どうして早稲田を志望したのですか。

守屋 親に「お前に早稲田なんてとても無理だ」とあきれられました。負けず嫌いに火がつかしました。今に見てろ、入ってみせる」という気になりました。——その後、アルバイトをしながらキックボクサーを続けました。2009年RISE70kgトーナメン

ト準優勝、ニュージャパンキックボクシング連盟ミドル級3位、全日本キックボクシング連盟スーパーウエルター級6位などの実績があります。キックボクサーとしてご自身でどう評価されていますか。

守屋 中途半端でした。「日本チャンピオンにならないなら、ランキング1位も意味がない」とジムの会長に言われてました。失敗したと思っています。

——そして、30歳を迎えたタイミングで公認会計士を目指して勉強を始めました。数ある国家資格の中で、なぜ公認会計士に挑戦しようと思ったのですか。

守屋 大学の授業で簿記に出会い、興味を持ちました。キックをやっていたときにお金の苦勞もしましたから、お金の専門家になるのもいいかなと……。1次の短答式試験には2度目で合格したのですが、2次の論文式試験に3度失敗して、優成監査法人（現太陽有限責任監査法人）へ監査補助者として入社しました。試験は最後に1回だけ挑戦してダメだったからあきらめる覚悟でしたが、その会社説明会で

リクルーターとして話をされた奥村（武博）さんに出会い、著書『高卒元プロ野球選手が公認会計士になった！』（洋泉社）を頂きました。それが大きな励みになって、何とか論文式試験に合格し、最終試験の修了考査にも2021年4月に合格しました。

——挑戦から8年かかりました。今は奥村さんと同じ会計事務所（オフィス921）に所属されています。八十さん、守屋さんのライフヒストリーをお聞きになっていかがですか？



八十 はい。高校時代の波乱の時間も驚きましたが、一度決めた目標に突進するパワーは、まさにスポーツのスキルアップと同じだと思います。8年かけての合格。守屋さん立派ですね。

テクノロジ―と意識変化

——日本のスポーツ選手のセカンドキャリアへの認識は、ひと昔前と大きく変化しました。広島カープのファンの西本祥子さんは、衣笠祥雄さんからあるエピソードを聞いたそうですね。

西本 初優勝した75年の主力メンバーにゲイル・ホプキンスがいました。彼はいつも練習の合間にベンチで分厚い本を読んでいた、衣笠さんが「何を讀んでいるの」と聞いたそうです。それは医学書でした。

「野球選手を終えたら医者になるから」という彼の話に、衣笠さんはひっくり返るほど驚いたと言っていました。当時、日本の野球選手にそんな発想をする人はいませんでした。ホプキンスは時間を見つけて、広島大学医学部で聴講生として授業も受けていて、米国に帰国後、整形外科医になりました。

——日本スポーツ学会事務局長で早稲田大学教授の太田章さんは、レスリングで4度五輪代表になつ

ています。確か最後の92年バルセロナ五輪で対戦した米国の選手は弁護士ではなかったですか？

太田 はい。米国のクリス・キャンベルです。彼は米国がボイコットした80年モスクワ五輪が幻に終わり、81年の世界選手権で優勝した後、弁護士になりました。ところが、84年ロサンゼルスと88年ソウルの五輪フリー90kg級で、私が2度銀メダルを獲得するのをテレビで見te奮起してトレーニングを再開。バルセロナ五輪で私は3回戦で敗れましたが、彼は銅メダルを獲りました。

——あの当時、太田さんの金メダルへの道を阻んだ男の異色のキャリアには驚きましたが、今の時代の日本のアスリートのセカンドキャリアへの意識は大きく変化しました。例えば女子柔道で世界王者になった朝比奈沙羅選手、ラグビーW杯日本代表だった福岡堅樹選手は、大学の医学部に入つて、医師になるべく勉強を続けています。バスケットボールBリーグのアルティ―リ千葉に所属する岡田優介選手や、



陸上男子800m元日本記録保持者の横田真人氏も公認会計士の資格を取得しています。この「二毛作」とも言われる考え方、意識の変化を、アスリートデュアルキャリア推進機構

の代表理事も務める奥村さんはどう分析しますか。

奥村 一番違うのは情報量です。昔はセカンドキヤリアやデュアルキヤリアという単語すら聞かなかったし、キヤリアサポートの意識も希薄でした。

加えてテクノロジーの変化。大リーグのダルビッシュ投手の練習がSNSなどですぐに見られる時代です。〇〇選手が医者になる、〇〇氏が公認会計士になるという話も身近に知ること、こういう資格がある、こういう仕事がある……とケーススタディーも広がった。じゃあ自分もチャレンジしてみようと

なる感じで、選手の意識もひと昔前とは違ってきています。

——八十さん、ちなみにJリーガーから弁護士になった方は他ほかにいますか？

八十 いないですね。昭和、平成、令和と見てきて思うのは、昔のようにサッカーが上手ければ、サッカーだけやっていればどういかなるという時代ではなくなっていることは確かです。今のプロ選手は知的好奇心が強く、深い人が、最終的に日本代表などで活躍しています。さまざま分野にも目を向ける能力が大事になってくる気がします。振り返ると、ガンバ大阪に入団した頃なんて、僕以外はやっぱり選手ばかりでした（笑）。

——守屋さん、この3人のメンバーの中で一番の若手ですが、昔と今を比較して何か感じることはありますか？

守屋 スポーツを辞めてからの人生のほうがもの凄く長いわけで、そのことに早く気づくことで、自分

の可能性もより広がると思います。早く自覚したほうが視野も広くもてると思います。

——さて、資格を取ったことで新たな人生の扉を開いた3人に質問します。「セカンドキャリアで驚いたことは何ですか？」キャッチフレーズを挙げて説明してください。

八十 **低い評価**と書きました。大学でスポーツをすると（社会に出ても）体育会系のつながりがありますが、プロにまでなった場合は社会に出ると『サッカーしかしてなかったでしょう』『サッカーしか分からないでしょう』という低い評価になってしまったことを身をもって感じました。

守屋 **非常識**と書きました。自分はアスリートだったので、挨拶や時間厳守は徹底していましたが、社会に出て仕事をすると、ルーズな人が少なくないことを知って驚きました。

奥村 **共通点の多さ**です。戦力外通告を受けたときは、野球しかしてこなかったからこの先どうした

らいいのか、自分には丈夫な体しかないから肉体労働しか思い浮かばなかったのですが、公認会計士の試験に取り組むようになって、スポーツでパフォーマンスを上げていくのと根本は同じだと気づきました。スポーツで上手い人のやり方を手本にするのは当然のことです。社会も同じなんだと。それを分かってから成績も伸びました。

失敗と成功の関係

——2つ目の質問です。「スポーツ選手はセカンドキャリアで通用するのか」。スポーツの特徴に『失敗』があります。例えば取り返しのつかないような局面でのありえない落球。他にも滑る、転ぶ、落とすなど、人前でみつともない失敗をさらしてしまう経験が誰にも付いてまわります。そのスポーツでの経験は、今の仕事に生きていますか？

奥村 **大いに活躍できる**と書きました。おっしゃる通りです。大失敗から何を学ぶかなんです。野球

は失敗のスポーツと言われてまして、日本を代表するイチロー選手だって、10回打席に立ってヒット3本しか打てない。7回は失敗しているわけです。その失敗を何につなげてゆくのか？ です。逆に言えば、失敗すれば失敗するほど成功に近づいてゆくとも言えるわけです。私も公認会計士の試験に9回ぐらい失敗していますが（笑）そこからどうしたらいいのか？が、スポーツ選手の通常のマインドですから、時にその失敗だけ切り取られて映像で使用されて憤慨したりもしますが、それが結果として人の行動のアイスブレイクにもなりますよね。

守屋 **【通用します】**と書きました。スポーツ選手は通用します。仕事をする上では円滑な人間関係が大切ですし、アスリートは何とかしてやり抜こうという力も強いです。例えば少し理不尽な状況にあっても、難しい組織であつても、アスリートは闘って何とかしようという場面の経験が人よりも多いですから、社会で仕事をするノウハウを初めから身につけ

ているとも言えると思います。

八十 **【通用する】**と私も書きました。スポーツで培った経験や能力を次に何かを見つけて注ぎ込むことができれば、人に負けない熱量を發揮して進めると思えます。問題はその次をどう見つけ出し、つなげてゆくかだと思えます。

ライセンスと一歩一歩

——3つ目の質問です。人生100年時代です。今、自身のセカンドキャリアとどう向き合っていきたいと思っていますか？

八十 **【一本道】**と書きました。サッカーをやっていたときはスポーツは失敗の連続なので、その失敗をどう乗り越えるか、失敗をどう成功に変えるかを考えていました。また一方でプロ契約を打ち切られるのではないかという半端ではない緊張感との闘いもありました。辛かったですが濃密な5年間でした。今は精いっぱい仕事をしていると、思わぬ良い結果

が付いてくる、思いもしない判決が出るという良い面での緩さもあります。自分の仕事を常に見つめ直し、サッカーをやっていたときの厳しさをこれからも忘れずに、次の目標、次の課題に一つ一つ丁寧に取り組んでいこうと思っています。

守屋

希少価値です。キックボクシングをやっていたときも特別なものを身につけたいと思い、ローキックを研究しました。好きな呼び名ではなかったですが、その威力は『死神ローキック』と言われていました(笑)。これからA I (人工知能)時代が進んでゆくでしょうが、仕事の最後の判断は人間がするものです。A Iに負けない希少価値を身につけたいと思っています。

奥村

チャレンジです。人生の土台は競技生活にあつたと思いますが、実際にプロ野球選手としては1年目から手術しなければならなくなり、4年目に戦力外通告となつたわけです。要因はいろいろありますが、なぜそうなつたか? を考えると、幼稚

園児のときから夢はプロ野球選手になることで、実際にドラフトにかかつてプロになり、入団会見でユニホームを着て写真をとったときにゴールになっていたと思います。大谷翔平選手の人生のプランニングでよく出てくるようになりましたが、1年目に一軍に上がる、3年目にはこうなるというプロ野球選手の青写真、設計図が自分にはなかった。自分なりに頑張つてはいましたけど……。今、周囲からは公認会計士の資格を取つてセカンドキャリアの成功者と言われますが、第2の人生でまだ何も成功なんかしていない。次のステップ、その次のステップとチャレンジしていかなければならない。今、土俵に上がっただけと思っています。一生もののライセンスは手に入れました。おかげさまで戦力外通告だけはありません(笑)。死ぬまで一步一步です。最後に『楽しい人生やった』と、シューと消えてゆく。そんなフェードアウトができるようにチャレンジしてゆきます。

スポーツに 純粋にコミット

武井 千雅子

(株式会社フォーラムエイト 代表取締役副社長)

取材・構成 玉木正之



武井 千雅子(たけい・ちかこ) 1965(昭和40)年大阪府大阪市生まれ。1989年フォーラムエイト入社、設計CADソフトウェアビジネスを手がける。3DCAD、FEM解析などへの展開を助け、2000年にはVRソフトUC-win/Roadリリースにより、エバンジェリストとしてVRビジネスを展開している。2013年より同社代表取締役副社長を務める。

——現在、WRC（ワールド・ラリー・チャンピオンシップ）の日本大会を「フォーラムエイト・ラリージャパン」と名付け、「タイトルパートナー」として支援されています。そのキッカケは？

武井 我が社は道路や橋の設計、自動運転の自動車のための街づくりなどに、VRバーチャルリアリティを活用した事業を展開しています。それとともに、高齢者ドライバーや脳に障害を受けた方の安全運転のためのシミュレーターの開発など、交通安全に関する様々な取り組みを事業化してきました。そんななかで「自動車文化を考える議員連盟」の古屋圭司会長（衆院議員）から、WRCのラリーを日本に誘致する話があったのです。ラリーは、もちろんスピードを競うレースですが、事故を起こせば勝利も何もないわけで、安全運転が基本です。そこで、何かお手伝いできることがあるば……と話を進めたところが、メインスポンサーに手をあげる企業が、なかなかないことがわかり……。トヨタさんはレースに出場しているので、

メインスポンサーにはなれませんか。そこで交渉を続けるうちに我が社が日本でのレースのタイトルパートナー、つまり「冠大会」の「冠企業」となったわけです。

——他にも女子サッカーWEリーグの大宮アルディージャVENTUSの支援もなさってます。

武井 はい。これは災害などに強い持続可能な社会を目指す「レジリエンス協会」というのがあって、そこで地震や津波の被害をVRなどで計測するなどの取り組みが評価され、我が社が表彰されたのですが、そのときに、その会に日本女子サッカー・なしこジャパンの元監督で、世界一にもなられた佐々木則夫監督が審査員の一人として参加されていたのです。それがきっかけで、我が社の伊藤（裕二氏・フォーラムエイト社長）と対談するなかでアルディージャへの協力を要請されました。佐々木さんも、かなり強力な営業マンでしたが（笑）、WEリーグが開幕することもあり、我が社も女性活躍企業とし

て「えるぼし認定*」を受けていましたから、そういう方針に添って女性のサッカーチームを支援させてもらうことになりました。*女性の活躍推進に関する取り組みが優良であるとみなされた企業に与えられる認定制度のこと

——スポーツの側は援助を受けて一定の利益を得ますが、企業としての利益はいかがですか？

武井 分かりません（笑）。会社としては全体の企業活動全体の20%くらいのエネルギーを注いでいると思いますが、そこからどれだけの具体的効果が上がっているかは数字で表せないのだから分かりません。ラリーの場合は「フォーラムエイト・ラリージャパン」とタイトルに名前を出し、それをBSフジの『プライムニュース』やBS-TBSの『報道1930』のテレビCMでも流しています。その直接的効果は分かりませんが、会社の求人には良い影響があるようですね。報道番組にCMを出している会社、パッケンという知的で人気のあるタレントを使っている会社ということで、イコール安心な会社と判断

されるかどうか分かりませんが、どんな会社か少々分かりにくくても（苦笑）、入社希望の学生たちの親御さんには、子供さんが入社試験を受けても良い会社だと判断してくださるようですよ。ラリーを通じて自動車業界と深い関係ができたことは、クルマの走る道路の設計や街づくり事業に関わっている我が社に、様々なメリットがあつたと言えます。

——具体的な金銭的利益というのは？

武井 それは我が社にはないですね。たとえば旅行代理店さんがスポンサーになると、ホテルの手配などを丸投げしてもらえとか、飲料メーカーさんなら会場での飲み物を独占的に納入できるとか、ほかにもコース上に造るゲートや観客席の設営といった仕事を受けられる会社などもあるようですが、直接的なキックバックがまったく存在しない純粹スポンサーというのは、WRCで我が社フォーラムエイトだけだったそうです。ただ、そういう姿勢は自治体には好印象を与えたようで、来年以降は愛知県の豊

田市、岐阜県の恵那市等が「豊田まちづくり株式会社」を作り、自治体が主催者となつて運営することになりました。もちろん我が社は、これまで通りタートルパートナーとして協力を続けさせていただきます。まだ公表されていない計画ですが、来年からは日本大会だけでなく、今年で言えば全13大会になります。また、ヨーロッパなどでのすべての大会のタイトルパートナーになることも計画しています。さらに再来年にはE V電気自動車によるラリーも実現したいと思えますし、我が社としてはクルマ社会が広がってきたウズベキスタンやタジキスタンといった国々にも、運転シミュレーターを提供していきたい。そういった事業にラリーがどう関わっていくのか、まだ分かりませんが、面白いかもしれませんよ。

——ラリー以外の別のスポーツへの展開も？

武井 来シーズンから、メジャーリーグの大谷選手出場試合の球場に、英語とカタカナでフォークラムエイトの広告を出します。ゴルフにもいくつか宣伝は

出していて、それは会社の経営者の方々に見られることを期待してのことですが、これも直接的な効果のほどは分かりません。最近では、バスケットボールなどで、チームそのものを買い取りませんか？ といった話も持ち込まれますが、私は性格が恐がりで（笑）、金額が何十億というような単位の話になるとビビりますね。伊藤社長はいろいろと前向きではあるようですが……ただ、プロ野球やどんなスポーツでも、我が社の技術を使って協力し合うような支援の仕方なら積極的に考えてみたいですね。今年のラリージャパンでも会場へ来られない観客のために、豊田スタジアムにメタバースを提供してチームの様子をメタバース空間で体験してもらおうようにしましたが、そういうやり方はいろんなスポーツに発展的に使えるし、協力できると思います。

——支援という形でスポーツの世界と交流されて、不満とか改善を感じられたことはありませんか？

武井 WRCでは肖像権や映像権など、様々な権利

が錯綜して写真1枚使用するにも、スポンサー企業ですら許可が下りないことがありました。そういうことが精神的ストレスにも感じられることもありましたが、我々は新参者ですからスポーツ業界のこともをもっと勉強して意見を言うようにしていきたいと思えます。ただ女子サッカーの場合で言うと、まだまだおカネが足りないというか、環境が劣悪なままの状態が続いていますね。練習用のグラウンドを借りるのにも苦労したり、選手はアルバイトをしながら試合に出たり……。プロのリーグを開始するといっただけ決めたなら、各チームに経営努力を任せるのではなく、器を頑丈にするとでも言えば良いのか……。リーグとしてもっと資金を集める努力をしてほしいと思えますね。

——日本のスポーツは企業スポーツ中心で、リーグ全体やスポーツ全体の発展より、強い一チームが牽引するカタチになりがちなところがあります。

武井 女子サッカーにもそのような「一強主義」の

傾向が感じられますが、企業スポーツでは公的な支援を受け難いですよね。WRCの人と付き合うと日本のスポーツ界のおかしさが分かります。幸いWRCは先程お話したように、日本の大会も地方自治体連合の主催で開催されるようになりますが、日本社会はスポーツ界だけでなく、企業社会でも「一強主義」に似たところがあつて、たとえばいくらIT産業でいろんな企業が成長しても、大手企業しか入札に参加できないベンダー・ロックインというシステムがあります。たしかに新参者の耳慣れない新興企業に任せて失敗したくないという気持ちも分からないでもないですが、欧米にはそんなシステムは無く、英国などは逆に新興企業や中小企業のみが参加できる入札のシステムもあります。一方日本の社会は、古い大手企業が中心で、中小企業が発展しにくいとも言えます。が、そんななかで我々中小企業がスポーツへの支援とともに名前を売って、産業界でも台頭してゆくという道筋はあるかもしれませんね。

——そのようななかで企業がスポーツと関わる一番の理由は何だと言えるでしょうか？

武井 それは……スポーツが楽しいから、ですよ。スポンサーになると、そのスポーツを応援するようになるし、楽しくなる。ラリーも見に行くと楽しいですよ。大騒ぎしながら応援する。日本人ならトヨタを応援したいし、韓国人は現代、アメリカ人はフォードを応援する……けど現代にはカッコいいラリーのことがいろいろ知るようになって、時速200キロ前後で曲がりくねった道を走らせているドライバールの横に座ってる道案内役のコードライバーの存在を知ったりしていくと、ますますラリーというスポーツが楽しく、面白くなってくる。

——優勝候補のフォードのベテランのコードライバーは、女性で数学の先生だそうですね。

武井 そうそう、いろいろ分かってくると、ラリーが純粋に楽しくなってきました。女子サッカーも同じ。

大宮アルディージャはナカナカ勝てないけれど（苦笑）、スポンサーになって、頑張ってる選手たちを応援して、サッカーというスポーツのことが分かってくると、楽しく面白くなってくる。

——茨城県は鹿島アントラーズが生まれて以来、若者の多くがアントラーズの応援をするようになり、暴走族が減ったという話も、初代チェアマンの川淵三郎さんから聞いたことがあります。

武井 ラリー人気が高いヨーロッパでは、暴走族なんて存在しないそうですよ。ラリーのほうが面白いから。もちろんスポーツは強制するモノではないでしょうから、我が社の社員にも強制的に見るとか、応援しろと言うつもりはありません。会社の仕事としてラリーや女子サッカーに関わることはあっても、好きになるかどうかは、その社員の自由、勝手です。我が社はあくまでもスポーツの持つ純粋な素晴らしさ、爽やかさにコミットしていきたい。それが結果的に我が社にとってもプラスになると考えています。

「走」第4回



人間は「走る」より「歩く」で進化する？

玉木正之

約700万年前、アフリカの密林^{ジャングル}で樹上生活をしていた猿の一種が地上に降り立ち、「直立二足歩行」を始めた。それが我々の祖先^ル人類の進化の始まりだったという。中学や高校の世界史の教科書にも、最初に「直立二足歩行・火を扱うこと・道具を創ること」が「人類を他の動物と区別する特徴」と書かれていた。

しかし最近では「道具を創る動物」(蟻塚からアリを取り出す道具を木の枝で創ったり、果物を割る石器を創るチンパンジー)も発見され、ヒトと動物の区別は難しくなってきたようだ。

さらに「直立二足歩行」という概念にも、異議が出されているらしい。確かにペンギンなど

の鳥類には「直立二足歩行」に見える動物もいる。が、外見上の問題でない。地上に降りた「猿」は「歩いた」のではなく「走った」のでは？ というのだ。

地上で猛獣に襲われそうになったり、獲物を捕まえるときは、「猿」の名残で手も使つて4本足で「走った」に違いない。そのうち背筋が伸びて完全に直立した人類も、猛獣から逃げたり、獲物を追つたりするときは、「走ること」が多く、「歩行」は休息行為か長距離移動の手段と考えられた。つまり二足「歩行」でなく《走る》ことで人類は人間になったのだ。(トル・ダコス『なぜ人は走るのか』筑摩書房)

なるほど。「走る」ほうが「歩く」よりも原始的^{プリミティブ}かもしれない。子供たちは歩くより走りたいがる。競走は紀元前の古代オリンピックから存在したが、競歩は19世紀生まれ。五輪には1908年ロンドン大会が初採用だった。

「走る」ことで「人間」に進化した人類は、「歩く」ことでさらに「未来人」に進化するかも？



夢劇場『馬』

No.29



忍者走法

長田渚左

今年の凱旋門賞は日本馬が4頭も出走した。大いに期待していたが、当日は大雨にも見舞われ、惨敗だった。

この時期のロンシャンは雨が多く、重い馬場がさらに重くなることから、ダート馬を出走させたほうがマシ”という落胆の声も上がった。

その悪条件下でも盤石なレースをみせた英国の牝馬アルピニスタだが、急遽引退、繁殖牝馬入りが決定した。ジャパンCで見られなかったのが悔しいが、彼女のセカンドキャリアに乾杯！……と思っていた矢先、とんでもない馬を見た。NHK-BS『秘境中国・謎の民 天上の大草原に生きる』の中に登場した、標高3000mのこの場所にしかな生存していない「岔口驛馬」だ。サラブレ

ッドより一回り小さいが、4000mまで駆け上り、千里を走るタフネス”と紹介された。特に目を奪われたのが馬の調教風景。馬祭に出走するための「側対歩」の訓練だった。

通常の競走馬は「斜対歩」である。馬の対角線上にある肢（右前肢と左後肢、左前肢と右後肢）をそれぞれ対にして地面に着いて離れる。しかし、「側対歩」は左右の前後の肢（右前肢と右後肢、左前肢と左後肢）が、対で地面に着いて離れる歩法。その見事な肢さばきは、陸上競技で話題になった「ナンバ走り」を思わせた。その動きを練習に取り入れることで、無駄のない効率的な走法になると注目され、100mの世界記録保持者ウサイン・ボルトの走法も、ナンバ走りの応用だったと専門家が指摘していた。

競馬の調教もインターバル走法や、プールでのクールダウンなど進化してきたが、馬のナンバ走りを掘り下げてみるのはどうだろうか？！

忍者のように走る日本馬が、凱旋門賞を制覇するかもしれない……。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011
埼玉県新座市野火止8-16-32
株式会社東美物流
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の春号第58号は2023年3月

上旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みになれます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

●新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（筑波大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）

／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。

都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2022年12月22日発行

第1巻第57号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 株式会社美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401